

---

# 遊戯王デュエルモンスターリアル

太刀川 傑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターリアル

### 【Nコード】

N7201X

### 【作者名】

太刀川 傑

### 【あらすじ】

瀬上龍二。羽場根高校2年。遊戯王同好会エース。昨年度部内ラッキング1位。遊戯王デュエルモンスターズ第5回全世界大会王者。

基本的には現実のルールに忠実です。ちょいちょいアニメ版のオリジナルルールが出てくるぐらいです。

主に現実のカードを使用します。それでもオリジナルカードもガンガン使用します。

温かい目で見守ってください。

序章 その少年、デュエルモンスターズ王者。（前書き）

この物語はフィクションです。

今話ではデュエルはしません。あくまで序章です。

## 序章 その少年、デュエルモンスターズ王者。

「ピピピピッ、ピピピピッ！」

「ふあゝ、朝か。あゝ寝みーな。」

部屋一帯に鳴り響く目覚まし音を右手で止めて起床する。

現在朝6時30分。

いつも通りの朝。とてつも無く眠い。

しかし、その睡魔を抑えて俺は1階へ降りる。そして顔を洗い歯を磨き朝食を食べに食卓へ向かう。

(神よ。今日こそまともな朝飯が食べられますように。)

目を閉じて鏡に向かって祈る俺。

しかしそんな願いも虚しく食卓からは香ばしい肉の匂いがする。

(嗚呼、そうか。今朝は焼き肉か。)

こんな感じで今日一日のモチベーションがガタ落ちする。もう右肩下がりだよ本当に。

「今日は焼き肉ですか。昨日はすき焼きじゃなかったでしたか？」

「朝しつかり食べないと午後までもたないわよ、龍二。」

「そうだぞ、これぐらい食べないと午後までもたないぞ龍二。」

母親と兄貴が同じことを言う。

いや、逆の持たないよ。焼き肉はギリだけど、焼き肉はアウトだよ。授業中に胃がもたれるよ。

「いや、いらないます。学校に行く途中になんか買い食いします。」

『そんなんじゃ午後までもた・・・』

バタンツ、と俺は食卓の扉を閉めた。もう聞きたくないわ。

自室に戻り高校へ行く支度を進める。

「ええゝと教材、筆箱、財布、定期・・・デツキ。」

今日は部活でランキング戦が行われるからな。遊戯王世界大会王者の威厳を保たなきゃな。

俺、瀬上龍二は遊戯王デュエルモンスターズ全世界大会第5回王者。

つまり、俺は遊戯王で世界一強い決闘者<sup>デュエリスト</sup>。

羽場根高校遊戯王同好会エース。昨年度部内ランク1位。

「たかが部内で負けるわけには、いかないよな。」

そうして今日も、デュエルを楽しむ。

日常編 第一話 部内ランキング戦！龍二VS十六間（前書き）

この物語はフィクションです。

今話ではデュエルはしません。

## 日常編 第一話 部内ランキング戦！龍二VS十六闇

「おゝす。悪りい、ちつとばかし遅れた。」

「遅いぞ龍二。お前が来ない間にもう一回戦始まってんぞ。」

私立羽場根高校特別ホール横、遊戯王同好会部室。

広さは普通の教室の1.5倍ぐらいかな。遊戯王同好会は昨年度俺が世界大会を優勝したことにより遊戯王同好会が文化部の中で一番重要視されるようになった。

そのおかげで昨年度よりも部室が広くなった。

「俺の相手は？」

「リングで待つてるぜ。挑戦者を示す赤の方で。」

そして、俺が世界大会を優勝したことによってもたらされたものは部室だけではなかった。

「嘘っ、今回は2回戦からデュエルリング使えんの！」

うちの部員は去年より少ないからな。」

なんとうちの学校にデュエルリングが作られたのだった。

デュエルリングー

テレビアニメ「遊戯王デュエルモンスターズ」で決闘者王国編デュエリストキングダムで使用された、デュエル専用のソリットビジョンシステムだ。大きさは体育館ほどらしい。

「うしっ、それじゃ早速リングに向かうかな。」

デッキケースを片手に俺は特別ホールへ向かう。

特別ホール一階・デュエルリング

「相変わらずデカイな、デュエルリングは。」

デュエルリング隣のデッキをカット&シャッフルするために用意さ

れたテーブル。そこにいたのは一年の十六閻じゅうろくえんだった。

「あつ、待つてましたよ！瀬上先輩！」

「おー、十六閻。つまり俺の相手はお前つてわけか。」

こいつの一回戦の相手は誰だよ。新人生に負けんなよな。

「注意しろよ、龍二。こいつは一回戦、高山先輩と当たつてパーフェクトしてるからな。」

「ま、マジか！そりゃ、気を引き締めてかないと。」

高村先輩。3年年で副部長。昨年度の部内ランク3位。それほどの強者を倒すつてことはかなりのできるな、こいつ。

「それじゃ、お互いのデッキをカット&シャッフルしますか、先輩。」

「その前に先行決めとルール確認だろ。」

「そうでしたね。」

まあ、部内ランキング戦だから決勝以外は1マッチバトル（一試合のみ）だと思っけど。

「先行決めは部のルールに従うがいいか？」

「はい、構いません。」

部内ルール？ 先攻後攻決め。

お互いにデッキをシャッフル。その後デッキの一番上を一枚めくる。めくつたカードの攻撃力が高い方が先攻を取るとゆうもの。一方のめくつたカードが魔法・罠だった場合モンスターカードを引いた方が強制的に先攻になる。

お互いデッキをシャッフル、カードを一枚めくりテーブルに置く。

カードは俺がライオウ。十六閻が青眼ブルーアイズ。圧敗した。

（青眼ブルーアイズの白龍？青眼デッキ？それとも海馬のファンデッキ？いや、だったら高山先輩に勝てるわけねえよな。これは青眼ブルーアイズデッキと見ていいだろう。）

「そつちの先攻つてことで、まっ、お互いフェアにやろうか。」

「何がフェアにやろうですか。」

ズルツ！いきなりなんですか。俺なんかイカサマかなんかした？

「ライオウは、先輩が世界大会を制覇した時のデッキには入ってなかった、改造したとしてもライオウを入れる意味はないはずですよ！変なことに気付いたな。どれだけ俺の大会用本気デッキとやり合いたいんだよ。」

「それ意見は却下されました。以上。」

「な、なんですか！目の前に立ちただかる敵は薙ぎ払うって言つてたじゃないですか。」

「言つてねえよ。なんだよそれ、どこの戦国武将だよ。」

「だったら何故、なんで大会用のデッキで、本気で来てくれないんですか！？先輩にはプライドがないんですか！」

「・・・」

こう、気難しい真面目タイプは嫌いじゃないんだけど苦手なんだよね。軽々しく「誇り（プライド）」って口に出す奴。

「人のプライドを砕くくらいなら、いつそのこと自分のプライドを捨てた方がマシだ。」

「？」

「カ」人を傷つける能力値だ。俺のデッキの場合は相手に恐怖を植え付けてもう二度とデュエルしたくないと思わせることが8割型だ。お前みたいに正々堂々、ただ戦いたいだけで勝負を仕掛けてくるのは0.5割ぐらいだよ。」

「・・・」

そう、その強すぎる戦術のせいで俺の対戦相手がいないとゆうことが多々あった。だから俺は、関東大会以上で本気になった時以外は大会用本気デッキは使わない。そう心に決めてある。

俺はリフトのある方へ歩き出す。

「分かりました。でしたら、」

「・・・？」

「このデュエルで俺が勝つたら、そのあと大会用のデッキで戦つて

ください。勿論、先輩が勝ったら1ポイント先取とゆうことで準決勝進出で構いません。」

「つまり、お前が勝ったらそれをノーカンにして大会用本気デッキリで正真正銘の決着をつけようぜっ、てことか。」

「・・・コクリッ」

十六閻は首を縦に振る。

「はあく、分かったよ。お前が勝ったらな。」

「！ありがとうございます。」

あくまでお前が勝つたらの話な。でもまあ、

負ける気がしねえ！

日常編 第二話 まさかの1ターンキル!?!ジ・エンド・オブ・メタルドラゴン

この物語はフィクションです。

ブルーアイズの表示は青眼と書いてルビにてブルーアイズと打っていましたがあめんどくさいので途中から「ブルーアイズ」と表示しました。

日常編 第二話 まさかの1ターンキル!?ジ・エンド・オブ・メタルドラゴン

部内ランキング戦第二回戦は、Aシードの俺と、一回戦勝者の十六閻との勝負になった。

十六閻は俺に勝ったら大会用本気デッキで戦えと言ってきた。まあ、どんなデッキがこようと俺は負けるつもりは無いがな。

山札置き場にデッキをおく。すると、フィールド横のライフポイントに「8000」と表示される。

そして、その下の部分が光り始める。

『デュエルスタンバイ。』

我が部に伝わるデュエル開始前の伝統の掛け声。恥ずかしいから俺はボソツとしか言わないけど。

「手加減しませんよ。」

「したら勝てないぞ。」

デッキからカード五枚引き、手札に。さて、十六閻はどんなデッキなのか、本音を言つと楽しみだな。

『デュエル!』

「俺のターン、ドロー!」

思考タイムに入る十六閻。ブルーフェイス青眼を中心に展開するであろうデッキ。

初手はどんな感じでくるんだ。

「俺はリバーズカードを二枚セット。ターン終了。」

アレッ?手札事故?だったらラッキーだ。このターン少しでもダメージを与えなければ。

「俺のターン。ドローフェイズ。」

こつちもこつちでひどい。モンスターがデスラクーダしか来てねえ。でもまあ、俺の作ったデッキは手札事故が起きても3ターンはしのげるからな。

「モンスターを裏守備表示で召喚、リバーカードを三枚セット、エンドフェイズ。」

「俺のターン、ドロー。・・・残念ですよ先輩。そんなぬるいデッキだから手札事故なんて起こるんですよ。」

「お互い様だろーが。」

初手でモンスターが出なかった分俺の方がまだ良いと思うけど。

「俺はわざとモンスターを召喚しなかったんですよ。」

バイスドラゴンか。だったら前のターンにモンスターを呼んどいてバイスドラゴンを召喚した方が攻撃力が2000で済んだはず。わざわざ1000にしてまで特殊召喚する意味はないだろ。

「まず俺はサイバードラゴンを特殊召喚。」

サイバードラゴンだと。仮に裏流サイバーだったとしてもサイバードラゴンはいらぬはず。キメラティック・オーバーキルだったとしたら青眼ブルーアイズのようなドラゴン族は不要なはずだ。

「さらに、手札より未来融合　フューチャーフュージョン　を發動。デッキに眠るブルーアイズ三体を墓地へ送り、エクストラデッキからブルーアイズアルティメットドラゴンを選択。」

「げっ！」

この状況だとこのまま龍ドラゴンの鏡ミラーを發動するのかわ？

「リバーカードオープン。リビングデットの呼び声！ブルーアイズを選択、蘇生！」

効果音と共にブルーアイズがリング中央に召喚される。この場合、サイバードラゴンを特殊召喚した意味なくらい？手札事故じゃないだから前のターンに以下省略。

「手札からフィールドパワーフュージョンを發動！」

「何っ！」

フィールドパワーフュージョン。融合素材を場で融合させることで召喚された融合モンスターの攻撃力を1000上げる融合魔法。

しかも、このターン十六闇は通常召喚を行ってないからもう一体モンスターを召喚することができる。召喚するモンスターによっては

1キルできるせ。

「フィールド上にいるブルーアイズホワイトドラゴンとサイバードラゴンを融合。いでよ、ジ・エンド・オブ・メタルドラゴン！」

「ジ・エンド・オブ・メタルドラゴン！マジかよっ！」

めんどくさいので俺はエンドドラゴンと呼んでいるが。融合素材に使用したモンスターの合計が攻撃力になるモンスター。この場合だと攻撃力はブルーアイズとサイバードラゴンで5100。さらにフィールドパワーフュージョンの効果で+10000の6100。マジかよ。

「そして俺は手札からアックスドラゴニートを召喚。」

「また強いのが出てきたな。」

「1ターンキル、いきます。バトルフェイズ！ドラゴニートで攻撃！」

俺のモンスターめがけて迫りくるドラゴニート。あきれれるほど単純だな。

「トラップカード発動。万能地雷グレイモヤ！」

「！！！」

なに想定外みたいな顔してんだよ。

「グレイモヤも効果でエンドドラゴンを撃破。」

バーン！！

とゆう炸裂音とともにジ・エンド・オブ・メタルドラゴンが破壊された。

「で、でも、ドラゴニートの攻撃は止まらないです。」

「周りを見るバーカ。罨カード、リアクティブルアーマーを発動。

はいっ、ドラゴニート撃破。」

ドーン、とゆう爆発音とともにドラゴニートも破壊した。ま、このデッキのコンセプトはラクダを守りながら手札増強、シンク口をしつつ相手をドンっ！て感じのデッキ。

「あせんなよ。デュエルは始まったばっかだぜ。」

「くっ。」

お、苦い顔苦い顔。

## 7ターン経過

俺の場にはギガンティックファイターとリバーズカードが四枚。十六夜の場にはブルーアイスが一体のみ。

「俺のターン、ドロー」

ライフは俺が無傷で十六闇が3500。俺がレットデーモンズドラゴンを召喚した時に神の宣告を使われ半分になり、ギガンティックファイターの戦闘で500のダメージを与えた。

「ク、くははははは！勝った、俺の勝ちです先輩。」

「どこをどうひねれば勝てるんだ。」

この状況で。

「俺は魔法カード魔法石採掘を発動！手札を二枚捨てて未来融合を手札に、そしてそのまま発動！デッキから個体のドラゴン族モンスターを墓地に送り、エクストラデッキからF・G・Dを選択！」

それが切り札なのか？F・G・Dの召喚には二ターン待つようだが、「場に伏せてある罫カードを発動させます。永続罫、墓地変更（セメタリ チェンジ）！」

墓地変更だと！墓地にいるモンスターの種族を宣言した種族に変えることが可能になるカードか。

「そして魔法カード、オーバーロイドフュージョンを発動！墓地にいるサイバードラゴン一体とその他複数のモンスターを除外して、キメラティックオーバードラゴンを召喚！」

まずっ！初手のエンドドラゴンに今度はキメラティックオーバードラゴンかよ。こいつはすげーや。

「さらに手札からサイバードークインパクトを発動！墓地に残した三体の素材をデッキに戻し、鎧黒竜 サイバードークドラゴンを召喚。特殊効果で選択するモンスターは素材に使わずに残しといったアルティメットドラゴン、よって攻撃力は、」



を持つ。もう十六閻の戦意はかけらほどしか残ってないな。

「手札を一枚山札に戻しゾンビキヤリアを特殊召喚。使者蘇生を発動し墓地にいるライオウを特殊召喚。レベル4ライオウにゾンビキヤリアをチューニング。氷結界の龍ブリューナクを召喚。手札を二枚墓地に送り、サイバードークドラゴンとリバーズカードを手札に。

「デュエルってここまで上手くいくもんなんだね。相手フィールドはがら空き。こっちは上級シンクロモンスターが三体。終わったな。

「三体で総攻撃っ！」

残り3500のライフは一瞬にして消えうせた。

「この勝負、俺の勝ちだな。」

俺は一回戦に勝利した。

日常編 第三話 二回戦 龍二VS角倉 速攻のノバスター！ (前書き)

この物語はフィクションです。

日常編 第三話 二回戦 龍二VS角倉 速攻のノバスター！

部内ランキング戦、初戦は俺が十六閤こむかにパーフェクトで勝利を納めた。

そしてランキング戦は準決勝へもつれこんだ。

「それじゃ、準決の相手は誰だ。」

「あいつだよ。」

デッキをカット&シャッフルするために用意されたテーブルの前には唯一の女子部員、角倉がいた。

「マジかよ！お前のデッキはそこまで得意じゃないんだよな。」

「何を言っても無駄だよ。私はこのデッキで戦う。」

「だよな。」

角倉のデッキ。スターダストドラゴンノバスターデッキ。

1ターン目でノバスターを召喚に戦況を一気に有利させるデッキ。対抗手段としてあげられるのが先攻をとって、バスターモードを破壊、もしくはノバスター召喚時に神宣で破壊だな。

「それでは先攻後攻を決めましょう。」

「おう。」

同時にシャッフルを初めて一番上のカードを引く。

「バイスドラゴン。」

「くっ、ゾンビキャリア。」

二戦連続で先攻をとられた。角倉に先攻はまずい。

あいつの1ターン目のノバスター召喚率は約8割だ。まずいな。

「それではフェアプレーでやりましょう。」

「当たり前だ。」

こいつもう、先攻をとった時点で勝利を確信してやがる。絶対に勝つ。

リングに上がり、山札置き場にデッキをおき、ライフポイント欄に

8000の数字が標示される。

『デュエルスタンバイ』

伝統の掛け声。二人ともボソツとしか言っていないけど。

「今年は貴方を倒してランキング1位の座をもらいます。」

「譲る気はないぜ。お前ごときに負ける気はしないね。」

「そう言っただけいられるのも今のうちですよ。」

うぜえ。なんだあの余裕は。

「そうか。じゃ、死の後の言わずに始めるか。」

「そうしましょう。」

『デュエル!!』

「私の先攻、ドロー!」

思考時間に入る。頼むから1ターン目からノバスターとかやめてくれよな。

「私は手札のD・HEROディアボリックガイを墓地へ送り、ダーク・グレファアを特殊召喚。」

ディアボリックガイを墓地へ送るところを見るとまさか!

俺が目をカッと開くとそれを見て角倉が微笑する。

「その通りですよ。瀬上くん。私は手札のゾンビキャリアを墓地へ送り、クレポンスを墓地へ送ります。」

気づいたところで遅かった。奴に、角倉に先攻をとられたら1ターン目のスターダストドラゴンノバスター召喚を免れないと。

「そして、墓地にいるディアボリックガイを墓地から除外し、デッキの中のディアボリックガイを特殊召喚!そして、手札を一枚デッキの1番上に戻し、墓地からゾンビキャリアを特殊召喚!」

ディアボリックガイのレベルは6、ゾンビキャリアのレベルは2。

合計で8になる。

奴がくる。

「レベル6のディアボリックガイにレベル2のゾンビキャリアをチューニング。」

レベル8シンクロ、スターダストドラゴンを召喚！」

轟音とともにスターダストドラゴンがリングに召喚された。正直かつこい。敵ながら天晴れって感じ。

「そして、場にカードを一枚伏せてターンエンドです。」

あれは確実にパスターモードだ。

角倉の奴、先攻だからって一枚だけとは、余裕みたいだな。

「俺のターン！」

「瀬上くんのドローフェイズ前にチェーンでトラップカード、パスターモードを発動！フィールド上にいるスターダストドラゴンをリリースし、スターダストドラゴン/パスターを特殊召喚！」

スターダストドラゴンが消滅しスターダストドラゴン/パスターが姿を表した。

戦況、不利！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7201x/>

---

遊戯王デュエルモンスターリアル

2011年10月29日12時03分発行